OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	上古漢語の声調における地域時代差 : 特に去声と入声の分類について
Author(s)	鳥羽, 加寿也
Citation	中国研究集刊. 2019, 65, p. 25-38
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76121
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　李号（第六十五号）　令和元年六月　二五―三八頁

上古漢語の声調における地域時代差

――特に去声と入声の分類について

鳥羽加寿也

一．はじめに

中古漢語（『切韻』音系）には平上去入の四声調が存在し、その調値は明確にはわからないものの、調類は『切韻』が分類する通りに四種類ということでまず異論はなかろう。ところが上古漢語となると、調値のみならず、調類も、さらにはそもそも上古漢語に声調があったか否かということすら、時に議論の対象となる。その原因は、第一に諧声字が声調を反映していないかのように思われること、第二に上古期には「韻書」が存在せず、声調に関する議論を行う際には詩文の押韻を主な資料とせざるを得ないためである。

上古漢語の声調については、清代からすでに議論が始まっている。顧炎武は上古にも声調は存在したものの、それは語の抑揚のようなものでしかなく、古人は後世の人ほど声調には拘泥していなかったと考え、「四声一貫」説を唱えた。また、段玉裁は、去声と入声の関係の深さに着目し、上古には去声が存在せず、後の去声は他の声調（主に入声）から変化したと考え、「古無去声」説を提出した(注1)。その後、伝統的な音韻学に近代的な言語学の手法が応用され、上古の声調に関する議論は、分類だけではなく音価にまで及ぶこととなる。その中でもHaudricourt氏の研究は特に重要であり、その研究によって、中国語の去声は韻尾*-sに由来し、特に入声字と関係が深いものは*-ts, *-ks, *-psといった韻尾を有していたと

いう可能性が指摘され(注2)、上古漢語には、現在の中国語のような声調（tone）が存在せず、声調の来源となる韻尾子音が存在したという説も有力となった。

しかしながら、これまでの研究は、その多くが、上古音の一般的特徴についてのものであり、近年では研究の進展とともに、上古音内部での時代地域差について議論が行われることもあるものの、その実態については十分に明らかにされているとは言い難い。

本稿では、まず上古漢語の声調について、すでに明らかになっている点も含め簡潔に整理し、続いてその時代地域差についての考察を行うことで、上古音における声調についての議論の精密化を試みたい。

二．声調の有無に関する議論について

上古漢語の声調についてまず問題となるのは、先にも述べた通り、声調がそもそも存在したか否かということである。声調についての主な資料は『詩経』であるが、『詩経』の押韻を観察すると、おおよそ、中古音における平声字は平声字と、上声字は上声字と押韻する傾向がある。しかしながら、この傾向を以て声調の存在の証拠とすることはできない。上古漢語に声調が存在しないという説をとる場合、一般的には上声は*-ʔ（声門閉鎖音韻尾）に由来すると考えるため、上声字同士の押韻は*-ʔと*-ʔとの同一韻尾による押韻と解釈しうるためである。このことは去声や入声についても同様である。

このように、声調の存在の有無ということについて、いまもって定論が存在しないのは、声調の存在を示しうる多くの事象が、声調の起源となる韻尾の存在を仮定することでも説明可能なためである。しかしながら、上古漢語に声調が存在しなかったと考えたとしても、後に上声となる字は韻尾*-ʔによって、去声となる字は韻尾*-ɡによって特徴づけられるため、声調（tone）の存在の有無についての議論は保留し、これらを上声類や去声類の字とみなすことには問題はないであろう。

本稿では、『詩経』における異声調字の通押現象が少なからず存在することを重視し、そのような通押が可能であるのは、詩歌においては声調（tone）の相違は子音韻尾の相違よりも押韻の協調に与える影響が少ないためであると考え、先秦の漢語にも声調（tone）は既に存在していたと暫時みなして議論を進める。ただし、議論の対象は専らその分類とし、音価の面は問題としない。以下本稿で上古漢語の「声調」という場合には、特に（tone）と付記する場合を除き、そこには上声の由来で

あると考えられている*ふや、去声の由来であると考えられている*ゐまでも含意される。「声調」という用語の使用によって、上古漢語に声調（tone）が存在していたと強く主張しているわけではないと理解されたい。

三．平声及び上声

上古において既に平声及び上声の類が存在したことは、すでに広く認められていることではあるが、ここで改めて確認したい。

中古音の平声及び上声は、『詩経』や『楚辞』の押韻でも明らかに独立していることから、これらが上古漢語でも、広い時代地域において、それぞれ独立した類であったことは明らかである。以下各文献から平声字及び上声字がそれぞれ独立して押韻している例をいくつか示す(注3)。傍線が付された字が平声韻字、網掛けの字が上声韻字である。

『詩経』

出其闉闍、有女如荼。雖則如荼、匪我思且。縞衣茹藘、聊可與娛。（鄭風　出其東門）

蒹葭蒼蒼、白露為霜。所謂伊人、在水一方。遡洄從之、道阻且長。遡遊從之、宛在水中央。（秦風　蒹葭）

我馬維駒、六轡如濡。載馳載驅、周爰咨諏。（小雅　皇皇者華）

江有汜、之子歸、不我以。不我以、其後也悔。（召南　江有汜）

山有栲、隰有杻。子有廷內、弗洒弗埽。子有鐘鼓、弗鼓弗考。宛其死矣、他人是保。（唐風　山有樞）

似續妣祖、築室百堵、西南其戶。爰居爰處、爰笑爰語。（小雅　斯干）

『楚辞』

朝飲木蘭之墜露兮、夕餐秋菊之落英。苟余情其信姱以練要兮、長顑頷亦何傷。（離騒）

保厥美以驕傲兮、日康娛以淫遊。雖信美而無禮兮、來違棄而改求。（離騒）

悔相道之不察兮、延佇乎吾將反。回朕車以復路兮、及行迷之未遠。（離騒）

和調度以自娛兮、聊浮游而求女。及余飾之方壯兮、周流觀乎上下。（離騒）

出土文献（楚簡）

竊鉤者誅、竊邦者為諸侯。(注4)（郭店簡『語叢四』）

凡説之道、級者為首。（郭店簡『語叢四』）
賢質以抗、吉凶陰陽、遠邇上下、可立於輔。（清華簡『管仲』）

以上示したように、平声字及び上声字は上古韻文においてそれぞれ独立して押韻する。しかしながら、諧声字は『詩経』等よりも古い段階の音声を反映すると考えられ、そこでは平声と上声との区別は韻文におけるものほどには明確ではない。

女（上声）：如（平声）
五（上声）：吾（平声）
養（上声）：羊（平声）

このような状況は、上古音内部でも比較的古い時代に属する層においては、平声と上声とは区別されず一類に帰されるということを示すように思われるかもしれない。しかしながら、『詩経』の中でも、「大雅」等、成立が古いとみなすことができる詩や、金文にみられる韻文でも平声と上声を分ける押韻は行われており、平声と上声が混用されることは少ない。

『詩経』
摯仲氏任、自彼殷商、來嫁于周、曰嬪于京。乃及王季、維德之行。大任有身、生此文王。（大雅　大明）
王赫斯怒、爰整其旅、以按徂旅、以篤于周祜、以對于天。（大雅　皇矣）

金文（注5）
叔家父作仲姬匡、用盛稻粱、用速先嗣諸兄、用蘄眉考無彊、哲德不亡、子孫之光。（叔家父簋）
祖所輔堵女所虎所鋁鎛（齊侯鎛鐘。本文は長大なため略し、韻字のみ。上声押韻。ただし鎛は入声字。）
考壽老（齊侯鎛鐘。本文略。上声押韻。）

以上の状況を鑑みると、平声と上声の区別というものは、諧声字の生まれた時代には存在しなかったと考えるよりも、やはり諧声字という資料自体が声調（tone）の区別を韻文ほど明確には反映しないと考えるほうが妥当であろう。

四．去声及び入声

平声と上声とに比べ、残る二つの声調、去声及び入声

については、問題ははるかに複雑である。『詩経』の押韻では、全体として見ると、去声字と入声字が区別されずに押韻しているように思われる箇所が存在する。以下、特に注記のない場合は、傍線を施した字が入声韻字、網掛け字が去声韻字である。

『詩経』
舒而脱脱兮、無感我帨兮、無使尨也吠。（召南　野有死麕）
一之日觱發、二之日栗烈。無衣無褐、何以卒歲。（豳風　七月）
鸛鳴于垤、婦歎于室。洒掃穹窒、我征聿至。（豳風　東山）
我行其野、言采其蓫。不思舊姻、求爾新特。成不以富、亦祇以異。（小雅　我行其野）
蕩蕩上帝、下民之辟。疾威上帝、其命多辟。（大雅　蕩）

同様の状況は、諧声字や破音字にも現れる。これについても、すでに広く知られていることではあるが、以下数例を挙げておく。

「祭」（去声）声の「察」（入声）
「石」（入声）声の「庶」（去声）
「説」の説（入）税（去）悦（入）の三音
「度」の鐸（入）渡（去）の二音

このような状況は既に早くから学者たちの注意をひいている。段玉裁が「古無去声」説を唱え、中古漢語の去声字は、もとは入声をはじめとする他声調に読まれていたと主張する際にも、去声と入声の押韻・諧声における関係の深さがその根拠の一つとなっている。

しかしながら、段玉裁の説はそのままでは言語学的に問題がある。この説では、去声が他の声調から後に分化する際に、その分化の条件が存在しないということとなる。王力氏の短入長入の説、すなわち上古入声においては長短が区別されており、長入は後に去声へ、短入は後に入声へと変化したという説は、この問題点を解決したものである。

一方で、Haudricourt氏や、その説を採用する学者たち(注6)は、去声の由来として、*-sと*-ts, *-ks, *-ps(注7)とを考えることにより、実質的に中古去声を二種類に分類する。すなわち、諧声関係等で平声或いは上声と関係が深いものは*-sと、入声と関係が深いものは*-ts, *-ks, *-ps

とするのである。

また、上古漢語に声調があると考える流派においても、王力説の一部訂正として、上古漢語に声調は存在するとしつつ、長入とは別に去声を考える説がある(注8)。

これらはどちらも、中古音の去声に二種類の由来があると考えることで、上古漢語の声調（韻尾）を五類（平・上・去1・去2・入）に分けているものであって、分類の観点から見ればほぼ同様の説である。本稿でも以下この五分類に従って考察を進める。なお、以下諧声関係上、平声或いは上声と関係が深い去声を去声1と、入声と関係が深い去声を去声2と便宜上言い分ける。

去声2の中で、唇音韻尾のものと舌音韻尾のもの(注9)（去声*-ɡ説によれば、*-ɡsと*-tsのもの）は、先秦の多くの資料で、一貫して平上去1声とではなく、入声と深い関係を持つ。まずこのことについて、『詩経』などの韻文や、出土文献にみえる通仮字(注10)を確認しておきたい。

『詩経』

舒而脫脫兮、無感我帨兮、無使尨也吠。（召南　野有死麕）

一之日觱發、二之日栗烈。無衣無褐、何以卒歲。（豳風　七月）

鸛鳴于垤、婦歎于室。洒掃穹窒、我征聿至。（豳風　東山）

期逝不至、而多為恤。（小雅　杕杜）

心之憂矣、如或結之。今茲之正、胡然厲矣。燎之方揚、寧或滅之。赫赫宗周、褒姒滅之。（小雅　正月）

周宗既滅、靡所止戾。正大夫離居、莫知我勩。（小雅　雨無正）

哀哉不能言、匪舌是出、維躬是瘁。（小雅　雨無正）

出則銜恤、入則靡至。（小雅　蓼莪）

南山烈烈、飄風發發。民莫不穀、我獨何害。（小雅　蓼莪）

乘馬在廄、摧之秣之。君子萬年、福祿艾之。（小雅　鴛鴦）

『楚辞』離騒

何瓊佩之偃蹇兮、衆薆然而蔽之。惟此黨人之不諒兮、恐嫉妒而折之。（離騒）

『老子』

為者敗之、執者失之。

大成若缺、其用不弊。

出土文献（楚簡）

述入声：遂去声2（多くの楚簡で習慣的に用いられる通仮）

折（及び折声の字）入声：制・製去声2（多くの楚簡で習慣的に用いられる通仮）

穫入声：邁去声2（清華簡『耆夜』「日月其穫」、『毛詩』蟋蟀では「日月其邁」に作る。）

柬入声：厲去声2（清華簡『繫年』一章「柬王」、伝世文献では「厲王」に作る。）

剌入声：賴去声2（上博簡『弟子問』「剌虐其下、不折其枳」(注11)）

謂群衆鳥、敬而勿集兮。素府宮李、木異類兮。（上博簡『李頌』の押韻）

……之不罔、天道其越也。薨薨之方起、夫亦適其歲也。（上博簡『李頌』の押韻）

以上の例からも、唇音韻尾及び舌音韻尾の去声2の字は、先秦時代には比較的広い範囲と時代で、入声類に帰することができるとわかる。ただし、この合一の傾向は、『楚辞』では明らかに弱く、これは、去声2が去声へと転ずる現象が、屈原の時代（戦国後期）にはすでに相当進行していることを示していると考えられる。

五．牙音韻尾の去声2について

唇音韻尾及び舌音韻尾の去声2がおおよそ入声類に帰される一方、牙音韻尾の去声2（去声*の説によれば*KS のもの。以下これを「甲類去2」と略称し、唇音韻尾及び舌音韻尾のものを「非甲類去2」とする）の振る舞いには、時代・地域による差異が大きい。

まず、そもそもこれ自体が去声1と2との定義ではあるが、諧声関係上、甲類去2は入声と同様に振舞うため、古くは入声と同一の類であったと考えられる。このことは、『詩経』の中でも比較的古い（西周時代）と考えられる詩(注12)、すなわち大雅及び小雅の大部分においては、甲類去2が陰声とではなく入声と押韻していることからもうかがい知ることができる。

『詩経』

采薇采薇、薇亦作止。曰歸曰歸、歲亦莫止(注13)。（小雅 采薇）

六月棲棲、戎車既飭。四牡騤騤、載是常服。玁狁孔熾、我是用急。王于出征、以匡王國(注14)。（小雅 六月）

殷之未喪師、克配上帝。宜鑒于殷、駿命不易(注15)。（大雅　文王）

清酒既載、騂牡既備。以享以祀、以介景福。（大雅　旱麓）

黄耇台背、以引以翼。壽考維祺、以介景福。（大雅　行葦）

蕩蕩上帝、下民之辟。疾威上帝、其命多辟。（大雅　蕩）

民之罔極、職涼善背。為民不利、如云不克。民之回遹、職競用力。（大雅　桑柔）

既敬既戒、惠此南國。（大雅　常武）

一方で、『詩経』の中でも比較的時代の新しいと考えられる詩、すなわち国風の大部分においては、甲類去2は入声とは押韻せず、陰声（特に去声1）と押韻する傾向がある。

『詩経』

我心匪鑒、不可以茹。亦有兄弟、不可以據。薄言往愬、逢彼之怒。（邶風　柏舟）

終風且暴、顧我則笑。謔浪笑敖、中心是悼。（邶風　終風）

式微式微、胡不歸。微君之故、胡為乎中露。（邶風　式微）

自牧歸荑、洵美且異。匪女之為美、美人之貽。（邶風　靜女）

三歲為婦、靡室勞矣。夙興夜寐、靡有朝矣。言既遂矣、至于暴矣。兄弟不知、咥其笑矣。靜言思之、躬自悼矣。（衛風　氓）

叔善射忌、又良御忌、抑磬控忌、抑縱送忌。（鄭風　大叔于田）

遵大路兮、摻執子之袪兮。無我惡兮、不寁故也。（鄭風　遵大路）

彼汾沮洳、言采其莫。彼其之子、美無度。美無度、殊異乎公路。（魏風　汾沮洳）

蟋蟀在堂、歲聿其莫。今我不樂、日月其除。無已大康、職思其居。好樂無荒、良士瞿瞿。（唐風　蟋蟀）

夏之日、冬之夜、百歲之後、歸於其居。（唐風　葛生）

羔裘如膏、日出有曜。豈不爾思、中心是悼。（檜風　羔裘(注16)）

『詩経』の中で、去声2について振る舞いに差があることは、既にBaxter氏が指摘した上で、これを時代差とも

地域差とも考え得るとしている(注17)。しかしながら、『詩経』の観察のみによっては、この差がさらに具体的に何を反映したものであるのかを明らかにすることはできない。そこで、以下『詩経』以外の文献について、甲類去2の振る舞いにどのような傾向があるかを観察したい。

『楚辞』の傾向は『詩経』の中でも国風などの成立の新しい詩に近く、甲類去2は去声1と押韻する傾向がある。以下の例では、傍線を施した字が去声1字、網掛け字が去声2字である。

『楚辞』

日月忽其不淹兮、春與秋其代序。惟草木之零落兮、恐美人之遲暮。(離騒)

彼堯舜之耿介兮、既遵道而得路。何桀紂之猖披兮、夫唯捷徑以窘步。(離騒)

吾令鳳鳥飛騰兮、繼之以日夜。飄風屯其相離兮、帥雲霓而來御。(離騒)

右に引用した例は、いずれも伝統的に屈原作とされる作品からのものであり、その押韻は戦国後期の楚方言を反映していると考えられる。これらの例を考えれば、戦国後期楚方言における甲類去2は、その大部分が既に去声1と合流していたとみなすことができよう。先行研究でも、戦国楚方言について、『楚辞』『荘子』の押韻分析から、同様の結論が下されている(注18)。

ここまでに確認した内容を表に整理すると、以下のようになる。

時代	春秋以前（諸声時代）	春秋期	戦国期
北方（中原）	甲類去2は入声類	甲類去2は去声類	甲類去2は去声類
南方（楚）	甲類去2は入声類か	不明	甲類去2は去声類

先に述べたように、非甲類去2は、先秦では広い範囲で一致して入声類であったと考えられるため、表には含んでいない。

ここで問題となるのは、春秋以前における南方（楚）での甲類去2の状況である。春秋期の金文については、楚地から出土しているものも存在するが、筆者の確認した限りでは、それらの中に甲類去2に関する情報を含むものは存在しなかった(注19)。戦国期の金文の中にも、僅かに「告」に従う字が「造」に通じる例が見いだされるのみである(注20)。

『楚辞』以前の南方において、甲類去2は北方と同様に、早期に陰声韻となっていたのか、或いは遅くまで入

声類に残留していたのか、それを確認するためには、楚簡の利用が有効である。

楚簡中の通仮字も、甲類去2の振る舞いについて、『詩経』の大雅等、成立の早い詩と同様の傾向を示すことがわかる。以下挙げるものがその例である。

備去声2：服入声（楚簡中に習慣的に見られる通仮）
亞去声2：惡入声（注21）（楚簡中に習慣的に見られる通仮）
繫去声2：擊入声（清華簡『繫年』二十二章「鬼繫」、『史記』では「魏擊」に作る。）
亦入声：夜去声2（清華簡『繫年』二十三章「坪亦君」、曽侯乙墓簡等では「平夜君」に作る。）
莋入声字「各」に従う：暮去声2（清華簡『耆夜』「歲喬員莋」、『詩経』蟋蟀の「歲聿其莫（注22）」を参照。）
敋入声字「各」に従う：路去声2（清華簡『封許之命』「敋車」、伝世文献の「路車」に対応。）
恋入声字「亦」に従う：赦去声2（清華簡『湯處於湯丘』「型亡卣恋」（注23））

先秦楚簡の作成年代については、年代測定の結果、清華簡が前三〇五±三〇年と判明しており、また上博簡もこれと同様、前三七三～前二七八年にかけて（戦国後期）のものであるとされている。『楚辞』のうち、『離騒』等諸篇の作者である屈原も、これらと同時期の人物である。

楚簡中の通仮字においては甲類去2が入声と同類であり、押韻においては去声と同類である傾向があるというのは、一見矛盾するように思われる。しかしながら、韻書の存在しない時代の押韻資料は同時代の音韻状況をほぼ忠実に反映するのに対し、通仮字は習慣的なものであるため、前時代の音韻状況を反映するということを考慮する必要がある（注24）。それゆえ、甲類去2の振る舞いについて、屈原賦の押韻と、同時期の楚簡中の通仮字に違いが見られるのは、まさに屈原賦や楚簡の出現した時期の直前に、甲類去2字が入声類から去声に転じたためであると考えられる。これを裏付けるかのように、通仮では甲類去2を入声のように扱う楚簡においても、韻文では甲類去2を陰声と押韻させている例も存在する。以下の例では、傍線を施した字が陰声韻字、網掛け字が去声2韻字である。

湯之行正、而勤事也、必哉於義、而成於度（注25）、小大之事、必智其故。和民以德、執事又餘、既惠於

民、聽以行武、哉於其身、以正天下。（清華簡『管仲』の韻文）

有逢大路含兮[注26]、戟栽與楮含兮。（上博簡『有皇将起』の韻文）

『管仲』の韻文は、『詩経』等から引用された韻文ではないため、文書作成当時の楚の音韻状況を比較的忠実に反映しているものであろう[注27]。また、『有皇将起』についても、文末に「兮」を用いる、楚地独特の形式であることから、楚の音韻状況を比較的忠実に反映していると考えられる。

六. 結論及び結び

以上論じてきた去声2についての内容を表としてまとめると、おおよそ以下のようになろう。

時代	春秋以前（諧声時代）	春秋期	戦国期
北方（中原）	甲類去2は入声類 非甲類去2は入声類	甲類去2は去声類 非甲類去2は入声類	甲類去2は去声類 非甲類去2は入声類[注28]
南方（楚）	甲類去2は入声類か 非甲類去2は入声類か	甲類去2は入声類 非甲類去2は入声類	甲類去2は去声類 非甲類去2は入声～去声類の変化途上

春秋以前の楚における去声2の状況は、それ以降の状況から判断するしかないが、一度去声類に変化した入声が、再び入声類に戻るという可能性は、その後去声2がさらに再び去声類へと変化することや、音声学的な見地から否定しうるため、去声2は入声類であったと考えられる。

全体としては、去声2は去声類へと変化するのであるが、その変化の速度が、南方と北方とで異なる。具体的には甲類去2については北方で先に変化し、非甲類去2については、南方で先に変化が発生しているということが、本稿で行った考察からみてとれよう。

最後に、本稿では声調を論じる際に韻文の他に通仮字を用いたが、理想的には、声調に関する議論は韻文、特に『詩経』からの引用によらない、特定の時代地域独自の韻文にのみよるべきである。現時点では、出土文献中の非『詩経』韻文の数量の不足により、そのような試みは不可能であるが、今後新たに韻文を含む先秦出土文献が増加することがあれば、本稿の下した結論は容易に覆されることも考えられる。そのため、本稿の内容については、今後ともさらに検証を続けていきたいと考えている。

注

（1）「四声一貫」及び「古無去声」については、それぞれ顧炎武『音学五書』及び段玉裁『六書音均表』に見える。

（2）Andre G.Haudricourt「怎様擬測上古漢語」（『中国言語学論集』所収、一九五四年、馬学進訳）

（3）以下、『詩経』及び『楚辞』の押韻に関して、韻字認定は王力『詩経韻読・楚辞韻読』（山東教育出版社、一九八六年）による。

（4）原文では「誅」は「戕」である。（竊鈎者戕、竊邦者為者侯。）「戕」の音は不明であるが、「誅」の通仮字であることは明らかであり、ここでは「侯」とともに、侯部平声で押韻しているとみなすことができある。『荘子』胠篋篇の「竊鈎者誅、竊國者為諸侯」を参照。なお、以降韻文の場合は、出土文献であっても通仮字等を置換済みの文を示す。

（5）ここで挙げる韻文及びその韻字認定は、王国維『両周金石文韻読』（王忠慤公遺書、一九二七年）による。

（6）Baxter氏や鄭張尚芳氏に代表される、音韻学における所謂「新派」の学者たちを指す。

（7）*-ts, *-ks, *-psについては、鄭張尚芳氏はこれを濁音であるとし、*-ds, *-gs, *-bsのように再構するが、いずれにせよ中古去声を二種類に分類していることには変わりがない。

（8）唐作藩『上古音手冊』（二〇一三年、中華書局）や、孫玉文『漢語変調構詞研究』（二〇〇七年、商務印書館）がこの説をとる。なお、本稿でいう「去声2」は、一般的には「長入声」と呼ばれる。この名称の違いは、「去声2」が中古音を基準にしているのに対し、「長入声」は上古音を基準にしているために生じるものに過ぎない。本稿では、「長入声」という名称により、上古入声に長短が存在したということを含意してしまうことを避けるため、この名称を使用していない。

（9）唇音韻尾の去声2は、去声の「内」と入声の「入」の同源関係などにその痕跡を見出すことができるものの、『詩経』や『楚辞』の押韻では既に舌音韻尾に合流している。

（10）「通仮字」という語について、本稿では広い意味で用いている。本来は厳密に（「本無其字」の）仮借字・（「本有其字」の）通仮字・古今字・異文を分けるべきであろうが、その厳密な区分は困難な場合も存在する。本稿では議論が煩雑になることを避けるため、これらを全てまとめて「通仮字」とする。

（11）白於藍『簡帛古書通仮字体系』（二〇一七年十二月、福建人民出版社、七八〇頁）に従う。原釈では「剌」を「列」と読み替えるが、この場合、鄭張尚芳『上古音系』（二〇一三年十二月、上海教育出版社）の韻部では、「剌」が月1部、「列」が月2部となり、主母音が異なる。「剌」を「賴」と読む場合

には、「賴」は祭1部であるので、「剌」と主母音が同じであり、この点でも原釋よりも優れている。なお、白於藍氏は「剌」を「利」と読み替えたうえで、更に「賴」と読み替えるが、「剌」と「賴」は諧声符が同一であるため、これらを直接通仮字とみなしても問題ないであろう。

(12)『詩経』における詩の年代については諸説あるが、ここでは高亨『詩経今注』（一九八〇年、上海古籍出版社）の「詩経簡述」を参照した。

(13) この詩は『毛詩』では文王期のものとされている。また、「莫」は字の如く読めば入声であるが、ここでは「暮」の意味であるため、去声（去声2）で読まれる。

(14) この詩は『毛詩』では宣王期のものであるとされている。

(15) この「易」字については、鄭玄は入声に読むとしている。

(16) ここに挙げた国風の詩の中では、この詩のみが西周期のものであると考えられる。

(17) Willam H.Baxter, A Handbook of Old Chinese Phonology（一九九二年、Mouton de Gruyter、第八章）

(18) 趙彤『戦国楚方言音系』（二〇〇六年、中国戯劇出版社、二六～三五頁）

(19) 楚系金文については、劉彬徽・劉長武『楚系金文彙編』（二〇〇九年、湖北教育出版社）を利用した。

(20) 郜：造（析君戟　東周五期前四五〇年～前三八〇年）や徃：造（番中戈　東周五期）など。

(21)「悪」には去声と入声との二音あり、それぞれ「にくむ」と「わるい」の意味であるが、郭店簡『緇衣』に「亞亞女亞迭白」（悪を悪むこと巷伯を悪むが如し）とあるように、「亞」は「悪」が去声と入声とのいずれで読まれる場合にも用いられる。

(22) 莫音暮。

(23) 原釈及び馬文增「清華簡《湯處于湯丘》新釈、注釈、析辯」（簡帛網、二〇一五年五月）の読みに従う。なお、「赦」について、『説文』には或体「赦」が見え、これは「恋」と同じく「亦」声に従う。

(24) この文脈における「前時代」がいつであるのかは判断しがたいが、現在発見されている楚地における最初の漢語文字資料が西周晩期のものである以上、楚国で文字使用が一般的となったのはそれより時代が下ると考えると、この「前時代」は春秋期であると考えるのが妥当であろう。そもそも、清華簡を例に取れば、そこに『子産』等その成立が春秋時代以降でしかありえない文献も含まれるため、「前時代」を西周期或いはそれ以前であると考えるのは不適当であろう。また、先に挙げた戦国期の楚系金文及び楚簡の全体的な用字法はおおよそ春秋期の楚系金文と一致することも、ここで「前時代」を春秋期と考える根拠となる。

(25) この字は原文では「尾」である。（湯之行正、而蓮事也、必

哉於宜、而成於厄、少大之事、必智亓古。和民以悳、執事又梌、既惠於民、聖以行武、哉於亓身、以正天下。）ここでは原注に従い、「度」に通じると解釈し、「法度」の意味でとる。「度」は「法度」の意味で用いる場合、去声に読まれる。諧声関係上、「度」は入声字「石」に従い、また「厄」も入声字であるため、「度」の去声音は本稿でいう所の去声2である。なお、「厄」が「度」に通じるのは、他の文献にも見られる例である。

(26) この文献における「含兮」の二字は文末の語気であるため、韻字とはならない。

(27) 楚簡における韻文であっても、『詩経』等からの引用である場合には、楚の音韻状況を反映しているとは限らない。清華簡『耆夜』には、『詩経』蟋蟀と類似する詩が引かれているが、そこでは甲類去2の「茖（莫）」が入声の「席」と押韻する。「蟋蟀在席、歳矞云莫」

(28) ここで戦国期の非甲類去2を入声類とするのは、漢代においても非甲類去2字が入声字と依然頻繁に押韻するためである。これに関しては、羅常培・周祖謨『漢魏晋南北朝韻部演変研究』（二〇〇七年、中華書局）所収の押韻表を参照。